

一重苦の中国人悼む

太平洋戦争末期に中国から強制連行され、安野発電所(安芸太田町)建設の労働に従事させられた人々についての学習会や追悼の集いが10月に広島市内などで開かれた。今年は元労働者の孟昭恩さん(1923〜2006年)の三男、憲法さん(55)が来日し、「大変な苦しみをした労働者たちを追悼できて感謝している」と語った。【武市智菜美】

広島市内など 学習会や集い

太田川水系にある安野発電所は戦時中、広島県の電力を賄うために建設され、中国人360人が強制連行された。そのうち17人は広島市内で被爆して5人が被爆死し、戦後に帰国するまでに被爆死を含めて計29人が亡くなった。2010年に強制連行された360人の名前を刻んだ「中国人受難之碑」が安野発電所に設立され、追悼集会が開かれてきた。

憲法さんは「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の招きで来日。10月18日に広島

市内であった学習会では、広島刑務所で被爆した孟さんの生涯について、親交があった記者らと語り合った。

継承する会の事務局長、川原洋子さんは孟さんの証言を紹介し、「(強制連行前に)中国で日本軍に捕まると、天井の梁からうつるされて殴られた時の痛みをよく強調していた」と明かした。孟さんは1993年に来日して8月6日の平和記念式典に参列し、後に中国人受難之碑の設立につながる交渉を進めた。元労働者たちの補償交渉などを長年取材した中

元労働者の三男来日

国新聞・岩崎誠特別論説委員は「ちゃめっけがあり、芯が強い人だった」と懐かしみ、「補償や謝罪より、歴史の真実を後世に伝えることを最優先に求めていたのが印象に残っている」と語った。

憲法さんは自身が18歳の頃、兵士になるのを強く反対された思い出を語り、「父は戦争の時に兵士だった経験がたつらく、ずっと心の中にあったのだろう」と話した。憲法さんは、安野発電所であった追悼の集いにも出席した。

一被爆者・孟昭!



父の孟昭恩さんについて語る憲法さん＝広島市中区で